

発行:太平洋核被災支援センター

<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>

事務局 宿毛市山奈町芳奈2779-2 山下正寿

<masatosi.sky@orange.zero.jp>

I. ビキニデーin 高知 2023

今年で3回目となる「ビキニデーin 高知」が5月5日から7日にかけて行われた。

5/5(金)

1. 幡多フィールドワーク

5月5日(金)、高知を出発した貸切大型バスが足摺岬に到着、総勢80名ほどの幡多フィールドワークが始まった。早速、宿舎のホテル「足摺園」の大広間でビキニ被災者から聞き取り調査が行われた。

① ビキニ被災者の聞き取り調査

まず、国際会議で使用したビデオを上映、これはビキニ問題を手短かに整理し、被災者救済を訴えたものだ。次いで、体調不良で参加できなかった横山さんの証言をビデオ上映した。

横山さんは14歳の時、長崎で被爆、戦後ビキニでも被災した二重被爆者だ。横山さんは第11富佐丸で獲ったマグロを東京築地で水揚げする前に、検査され外洋投棄させられている。釣ったマグロを食べ、スコールで体を洗っていた。50歳を過ぎた頃からマグロ船に乗っていた友人が次々と死亡の知らせが届くようになった。ほとんどが白血病やガンだった。2019年には胃ガンの手術を受け、その後体調が良くない。それでも、国などを提訴した訴訟の原告に加わっている。



谷脇さんの証言

横山さんのビデオが終了し、谷脇さんがマイクを握り証言した。

「私は19歳でマグロ船第13光栄丸に乗り、ビキニ

近くで操業していた。釣った魚を食べ、シャワー代わりにスコールで頭や体を洗った。日本では釣ったマグロを全部捨てられた。命がけで漁をしたのに涙が出た。情けなかったがどうしようもなかった。40歳過ぎから目まいがするようになり、船を降りるたびに病院へ行った。医者からはC型肝炎と言われ、2015年に肝臓ガンと胃ガンの手術を受けた。自分が被ばくしているかどうか分からないが、魚が放射能に汚染されていたのだから体に影響がないとは思えない。公海で行われた水爆実験で被害を受けたのだから、国には責任をとってもらいたい。」と悔しさをにじませた。

② サンセットクルーズ

聞き取り調査がすむと、すぐサンセットクルーズだ。しかし、乗船予定者が乗らぬうちに、漁船第1便が出航するなどハプニングがあったが、高知のメンバーが県外者を優先しましょうと自ら辞退、そのおかげで他の方々は第2便に乗船できた。何とも有難かった。辞退者の5名は主催者の手筈で港内の釣りに興じた。釣りは初めての方もおり、小さなフグやネブツダイだが、釣るたびに歓声が上がった。時間的余裕のある第2便の人たちは先導され、ホテルから崖伝いに港まで降りた。急峻な細い道のハラハラ、ドキドキ感と港や太平洋の眺望がすばらしかった。

サンセットクルーズは厚い雲に阻まれ、沈む夕陽を見ることはできなかったが、海上から足摺岬を眺める稀有な経験をすることができた。また、それ以上に温かな思いやりの夕陽を感じることができた。



5/6(土)

5月6日(土)、朝食後、土佐清水市生涯学習課市史編纂室長の田村公利氏と中ノ浜区長西川英二氏の指導で漁村文化めぐりのフィールドワークが行われた。

③ 漁村文化めぐり

天候の関係で、足摺岬の巨大なジョン・マンの銅像を見上げ、展望台から広大な太平洋と黒潮の流れを見下ろすイベントは出発までの自由行動として行われ、多くの方が参加した。一行はバスと車で中ノ浜に移動し、ジョン・マンの復元生家や納屋、宗田節(メジカ)加工工場を見学し、説明を受けた。



宗田節づくりを学ぶ

田村室長と西川区長から、17世紀に紀州漁民が足摺沖にカツオの好漁場を発見したことにより、土佐清水に優れたカツオ漁と鰹節製造技術が伝えられ、紀州を中心に各地との人的・経済的・文化的交流が進んだこと、そしてジョン・マンの生い立ちと遭難、アメリカでの生活や日本帰国後の活動など、波乱万丈の人生が紹介された。

また、動力船導入後の遠洋漁業、昭和30年代以降の宗田節加工などについて学ぶことができた。西川区長は「ジョン・マンの一番の功績は、小笠原島民を追い出すことなく日の丸を掲揚させ続けることで、世界に日本領と認めさせたことではないか。」と説明を締めくくった。

土佐清水の豊かな漁業文化の歴史的背景を考えると、ジョン・マンの活躍やマグロ船に乗る多くの若者が排出したことも腑に落ちるものがある。また、武政商店で売られていた宗田節などのお土産も好評だった。

一行はその後、越で戦中の特攻ポート「震洋」の基地跡をフィールドワークし、下田のいやしの里へ移動した。

④ 幡多ゼミOB・顧問との懇談会

いやしの里レストラン「山川海」で昼食後、3階会議室で幡多ゼミOB・顧問との懇談会が開かれた。

まず、山下先生より幡多ゼミ結成の歴史的背景と経過が説明された。高知県には高校生徒会連合など高校生の自主・自治の風土や力があつたが、県教委の3校間以上の交流禁止の通達などにより青年の社会参加が危機的な状況だった。そこを何とかしたいという考えから、地域から学ぶ「足もとから平和と青春を見つめる」幡多ゼミの活動を始めた。地域の老人たちは現代史の証言者であり、ビキニ被災調査の時、ゼミ生が休日なのに何度も来て真剣に質問しメモする姿に、心を開いていった。事実を明らかにする上で高校生の果たした役割は大きい。

彼らは掘り起こした地域の歴史を多くの人たちに伝えようと紙芝居、ビデオ制作、演劇などの表現活動に取り組んだ。違う学校の友人もでき、気さくに何でも話せ、活動に参加するのが楽しくてたまらないゼミ生の姿が多く見られた。「学ぶ喜び」を知り、表現力を高め、自らの進路を切り開いていったゼミ生も多い。

現在、ゼミ活動は高校多忙化やコロナ感染対策などで停滞しているが、この機会に高校生だけでなく、中学生、大学生、青年、社会人など、世代を越えて共に学び、育ち合う生涯学習サークルに発展させる準備中である。

さて、貸切大型バスで参加した方々は車中で映画「ビキニの海は忘れない」、日本テレビ・今日の出来事で放送の「(日韓)友情づくり」を観ており、30年以上の時を経て成長したゼミ生の今を目の前にすることになった。OBの参加は4人で、それぞれがゼミ体験を語り感想を述べた。

ビキニ世代の橋崎律子さんは木造被災船「住吉丸」の発見や沖縄平和の旅での調査、映画作りに参加、そして、徐々に自信をつけ生徒会長として活躍した高校生活に触れた。現在は中村民主商工会の事務局長として経済的に困難な人のために地域で活動している。

また、田中香織さん、津野奈緒さん、北山愛さんは映画「渡り川」を制作し日韓交流を進めた中心人物だ。津野さんは2度韓国を訪問、元慰安婦として初めて証言台に立った金学順さんとの出会い、戦後50年「韓国光復節」に招待された時の驚きを語った。現在は医療生協の職員として地域づくりに関わっている。田中さ



ゼミOBの発言で笑いの渦が

ん、北山さんは映画作り、日韓交流の経験を語り、人の役に立つ仕事に就きたいと介護や福祉の仕事をしている。

4人ともよくしゃべった。笑いをたっぷりとった役者まがいのOBや壁展示の写真、資料などを指さしながら的確に説明したOBもいた。打ち解けた雰囲気での懇談が進んだ。

参加者からの質問に答えた中に、彼女たちの成長ぶりを示す発言があったので紹介する。

- ・地域の歴史を発掘してきたが、その時、日韓の加害・被害の厳しい関係だけでなく、朝鮮の人たちと地元の日本人の間には多くの心温まる交流があった事実を大切にしてきた。
- ・山下先生から加害・被害だけでなく、抵抗も考えなくてはならないと教えてもらった。高知県や幡多にも戦争に抵抗・反対した多くの人たちがいたことは地域の誇りだ。
- ・私には高校生の子どもがいるが、いわゆるZ世代、全く理解できない。しかし、互いの違いを尊重し、一緒に勉強するつもりで接している。

2. 5/7(日)高知市全体集会

高知での全体集会は、約250名が参加し開催された。劇団「創」のオープニング後、県健康政策部長のあいさつを川内敦文・健康対策課長が代読した。

次いで、ジャーナリスト笹島康仁氏と明星大学・竹峰誠一郎教授が二人同時に壇上に上がり、交互に対談形式で報告した。基本的に、笹島氏は「核兵器禁止条約・締約国会議を取材して」、竹峰氏は「核兵器禁止条約と世界の核被害者」というテーマである。

竹峰氏はマーシャル諸島での現地調査を踏まえて発言した。「高知発信のビキニ核被災を太平洋の核被

災、さらに世界の核被災として広く捉えることが大切だ。また、核被災は人権問題としても、環境問題としてもグローバルにとらえる必要がある。そうすることで、世界の人たちと幅広く連帯することができる。」と提起した。

さて、エヴェレン レレボウ＝ジェアリックさんはマーシャル諸島共和国政府の核問題委員会・教育普及担当を務めている。エヴェレンさんは「マーシャル諸島の核実験は今一ロングラップの人たちの体験を受け継いで」と題して、3.1 ブラボー水爆実験で被爆し7度も流産した母親の体験を語った。そして、「マーシャルの教科書には被爆のことは載っていないが、私は子どもたちに教えている。子どもは国の未来だ。」「私は第五福龍丸のことしか知らなかったが、その他の漁船被災と高知でビキニデーをしていることを伝えたい。」「マーシャル諸島の3月1日は核被害者の追悼記念日だ。1週間、様々なイベントをしている。みなさんにぜひ来てほしい。」と呼びかけた。

午後は、アメリカ出身の詩人・絵本・エッセイ・ラジオパーソナリティーとして幅広く活動しているアーサー・ビナードさんが「果てない『原子力時代』のナレノハテのぼくら」と題して紙芝居を使って講演した。引き続き、アーサーさんと青年による討論「核のこれからを語ろう」が行われ、壇上にはアーサーさんと高知の青年が、会場から広島的大学生、青年、そして福島の斎藤先生が討論に参加した。

さらに、高知県の被ばくに関する報告が行われた。高知県原爆被災者の会会長・桜木敏幸氏、元マグロ漁船員（第五海福丸）・小笠原勝氏、大黒藤兵衛さん（第七大丸乗組員）の長女でビキニ被ばく船員訴訟原告団長・下元節子氏、弁護団長・南拓人氏がそれぞれ報告した。



エヴェレンさん（中央）と竹峰教授（右側）

ゼミOB4人が「ビキニデーin高知2023」の集会宣言を読み上げ、締めには幡多ゼミ作詞・作曲「黒潮に平和を」を高らかに合唱し、満場の拍手で採択された。

最後に、太平洋核被災支援センター事務局長・山下正寿氏がエヴェレンさんに花束を贈呈し、謝辞を述べた。「エヴェレンさんから貝の飾りをいただき、お礼に土佐沖の神秘的な「八丈宝」を用意しましたが、マーシャルにもあるそうです。高知とマーシャルは黒潮でつながっています。今後、より一層マーシャルとの交流を深めていきたい。来年は、ビキニ事件70周年、裁判も大きな山場を迎え、国際的にも注目されるでしょう。来年のビキニデーin高知は、5月11・12日を予定しています。また、ぜひお会いしましょう」満場の拍手万雷で「ビキニデーin高知2023」を打ち上げることができた。

II. 下田探求ゼミナール

3月26日(日)四万十市下田地区で探求ゼミナールが実施された。

地区フィールドワークは歴史的建造物、河口漁業、旧下田中学校跡地などを見学する予定だったが、当日の雨と強風のため展望台で簡単な説明を受けるだけに終わった。

地元の人たちとの懇談会は20名の参加でホテルの会議室で行われたが、地元参加者は移住者2名、中学生4名、小学生3名だったこともあり、議題は自ずと教育問題に絞られた。まず、幡多ゼミ顧問の山下正寿氏があいさつした。「私たちは下田の歴史やみなさんの未来づくりから学ぶために来ました。中でも下田での学びをどうするか。みなさんの思ったこと、考えていること、何でも話してほしい。」

中学生④「中学が高台から低地の小学校へ移った時、友だちが3人減り、バラバラになったのが残念だった。」

中学生⑤「4月、中学に1人入学してくる。うれしい」

中学生⑥「地震の避難訓練で、Jアラートが鳴ると机の下に隠れ、揺れが収まると高台の旧下田中跡地に駆け上がる。ところが、跡地で大学誘致の工事が始まると、もう一つ上のいやしの里まで走らされる。心臓が飛び出そうだった。」学校統廃合により分断される子どもたちの気持ちが伝わってくる。移住者・親⑦「中学生は元々高台の安全なところにいたのに、危険な低地の小学校に降ろすとは異常だ。命が一番大事なはず

なのに。」

様々な意見が出る中で、サーフィンが話題に上がった。下田はサーフィンのメッカでもある。「部活でサーフィンをしたい人は？」と投げかけると、子どもたち7名全員が一斉に挙手、さすがの人気だ。川渕さんが「サーフィン部のある学校もあるよ。宮崎県と静岡県。サーフィンを通じて自然環境保護やレスキューの力がつくと言われている。」その意見を受けて、移住者・親⑧が地域の声をまとめた。「私たちは防災に特化した教育環境を作りたいと考えている。下田地区では、津波避難時には1,200人が高台に避難することになる。その時、子どもたちも避難の助け合い、協力、支援ができるように育てたい。」移住者・親⑧が続いた。「子どもをどう育てるか。幡多ゼミの蓄積したノウハウを活かしたい。ぜひ一緒に活動したい。」

幡多ゼミでの学びの長所を山下氏が説明した。「幡多ゼミでは、学校の中だけでは経験できない地域から学ぶ体験学習があり、その学びの中で仲間との絆が深まり、進路を切り拓くきっかけにもなる。望めば、福島にも韓国にも行ける。」続けて、ゼミOBが自分の経験を語った。「韓国に行き日韓交流、ゼミでしか体験できないことが私には大きかった。」「心に響く体験が大事で、ゼミ活動で世界が広がった。私の居場所としても大きかった。」

下田の教育課題について、移住者・親⑨が述べた。「四万十市は中村中学校と西中学校の2校だけでいいのか。小規模校の良さや保護者の気持ちや行政には分かってもらえなかった。今後、区長を中心に地域の要望をまとめて市へ提出するようにしている。」名鹿の渡辺さんが発言した。「この活動を下田だけに終わらせないで、四万十市全体や県に広げたい。行政は子どもを中心に考えてほしい。」

今回の下田探求ゼミナールは雨、風のため計画通りにはできなかったが、中学生、小学生の生の声を聞くことができ大きな成果だった。そして、地域の人たちと幡多ゼミとが連携して活動する方向で終了した。

閉会后、ゼミOB4名と顧問4名が、今後のゼミOB活動について話し合い決定した。①お互いに連絡を取り合い、5月の「ビキニデーin高知2023」に参加する。②8月はゼミ結成40年、何をするか検討する。

地域探求ゼミナールが少し形になってきた。そんな手応えを感じた一日だった。